

第十六軍野戦兵器廠略歴

歴代廠長

陸軍中佐 下田 剛
 同 菅原 秀吉
 陸軍大佐 藤本 清市

年月日	概 要
昭 一 六 十 三	東京都板橋区常磐台に於て編成完結
土 五	才二十四野戦兵器廠と命如せらる
一 十	宇品港に到着
一 五	宇品港松尾近衛師団長の隷下を脱し才十六軍司令官の隷下に入る
一 三	高雄港上陸
一 一	三上中尉の指揮する移動修理班一中隊 勤務中隊一小隊を「スマトラ」攻略才三十八師団に配属 高雄港出発
二 一	中村少佐の指揮する移動修理班一中隊 勤務中隊一小隊を「スラバヤ」地方攻略の才四十八師団に配属 高雄出発
二 二	中田中尉以下 十二名 東海林支隊に配属 高雄港出発

年月日	概要
昭 二 五	兵器追送業のための星島中尉以下移動修理班一中隊本部約三小隊を残留し主力は高雄港出発
二 六	「スマトラ」派遣隊「パレンバン」に上陸
三 一	主力瓜哇島「ボシヨネゴロ」附近に上陸 「スラバヤ」方面派遣隊は「クラガン」に上陸
三 八	主力「バタミヤ」に進駐本廠を開設す
三 九	「スラバヤ」入城 オ一支廠を開設す
三 十	大西大尉以下 約百名「エレタン」に上陸
三 一 六	大西隊「バンドン」進駐 旧蘭印工廠を接收オニ支廠を開設
五 五	星島中尉高雄残留部隊「バタビヤ」に到着本廠に編入
五 一 五	本廠「バンドン」に進駐オニ支廠を併合す
八 五	「パレンバン」より「バタビヤ」に到着せる三上中尉以下を以て「バタビヤ」にオニ支廠を開設すに 馬淵上等兵以下を派遣す 終戦 当時に於ける部隊の配置次の如し

0176

年月日	
概要	<p>本廠 (「バタビア」市)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「タンジョンスリオクト」出張所 「セルホン」弾薬庫 「ルミン」弾薬庫 「スカスミ」弾薬庫 「クヌンバル」分散地区 (倉庫工場弾薬庫) <p>オニ支廠</p> <ul style="list-style-type: none"> 「マラン」出張所 「バドゥ」弾薬庫 「ラワン」倉庫 「サラダン」弾薬庫 「ソロ・バンカ」倉庫 <p>オニ支廠</p> <ul style="list-style-type: none"> 「バンドン」倉庫 「タイヤゴロヲ」弾薬庫

年月日	概要
	<p>「ボジヨンクローネン」弾薬庫 「セラチュール」弾薬庫 「チバムット」弾薬庫 「セラチウ」弾薬庫 「タシクマラヤ」弾薬庫 中部出張所 ハ「マゲラン」 「スマラン」倉庫 「フロワケルト」弾薬庫 尙當時「マラバル」複廓を始め バタビヤ バンドン スラバヤ マ ラン ソロ マゲン 等の地区に於ける約二十区に於ける防空部隊の 配置次の如し 本廠 (「バンドン」市) 「チマヒ」出張所 「チラチヤラス」出張所 「スマラン」出張所</p>

0178

年月日	概 要
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>
昭和七三	<p> 才一 支廠 (「スラバヤ」市) 「マラン」出張所 才ニ 支廠 (「バタビヤ」市) 「ダンジョンフリオク」出張所 福島中尉以下三十三名 バヤ鉾山開港のため同地に派遣 出張所を開設 採炭を準備す 才一 次槻柳工場増設作業を開設す 才一 移動修理班を才二十六軍に転属 才ニ 十六軍野戦兵器廠要員として将校以下を転属 「チエール」油田復旧のため 山本少尉以下を派遣 才ニ 十六軍野戦兵器廠と改称 南方軍野戦修理廠「バンドン」工廠を編成し旧蘭印工廠を同廠に引継 す 本廠「バタビヤ」に移転す 「チマヒ」出張所を廃し同所に才ニ支廠を開設す </p>

年月日	概要
昭 大 二 三	「バヤ」鉦山南発作業を軍政監部鉦山課に引継ぎ出張所を閉鎖す
十 五	「チラチャツ」出張所を閉鎖す
十 六	「ミ」工事解体 解体作業開始 本部を本廠内に置く
十 九	倉庫工場分散防空計画に依り開始す 築城材料を補給す
十 四	中部出張所を「スマラン」に開設
十 五	中部出張所を「マゲラン」に移転
十 八	築城田木材伐採のための「バンテン」井「セラシ」渠「グリーンアセバン」地下施設は概ね八分通り完成しあり
十 九	又同時に於ける兵補約二千二百名
十 三	作戦諸任務を解かる
十 三	「イ」側独立運動に伴い暴徒各所に蜂起し支廠出張所との連絡不可能となり 特に「カ」支廠中部出張所と連絡全く杜絶す
十 三	南方軍戦術序列を解かる
十 三	連合軍（英印才二十三師団）到着 兵舎倉庫一切の警備を引き渡し旧勤務中隊兵舎に移転す

年月日	概 要
昭 平 十 八	クスニバルー弾薬庫修理工場其の他の警備を「ピンヂヤミイレ」部隊に引き継ぎを完了す
十 十	「カシン」弾薬庫の警備を自隊に於て強化す
十 六	宮下少尉以下五十名連合軍労役のため始めて「タンジョン」及び「オク」に派遣
十 六	「カシン」弾薬庫「イ」側に襲撃せられ中川原少尉以下五名戦死吉野上等兵以下四名負傷す
十 平	補給並に引継ぎ員として余諒大尉以下四十六名を、残置し主力を「クノシマス」に集結す
十 五	石川豊秀大尉以下四十名「ボゴール」に於て、武装解除を受け「バダビ」に送られ連合軍の使役に服す
十 五	小井准尉以下十六名弾薬処理のため「スカスミ」に派遣す
十 五	土井少尉以下十六名弾薬処理のため「セルボン」に派遣す
十 五	武田中尉以下十五名弾薬処理のため「カシン」に派遣す
十 五	「カリアンガン」中「ボジョン」タンク「ネン」弾薬庫に於ける弾薬処理の

年月日	冊	概要
二一五	一	たの佐々木大尉以下十五名を派遣す 「セルポン」弾薬庫に「イ」側未爆 増田作一兵長戦死 内田衛生伍長負傷す
一三	二	「セルポン」弾薬庫に於ける弾薬処理作業援助のため関川少尉以下二十一名を増加派遣す
二七	二	「グリーンマス」集結地を撤し「コタバト」の移転す
二三	二	「ダイヤゴロラト」弾薬庫に於ける弾薬処理のため野口准尉以下十七名を派遣す
二五	二	「ボゴール」連合軍作業のため約五十名の要員を派遣す
四四	四	廠長藤本大佐武装解除の上「バタバア」移動廠本部を「バタバア」残置隊に設す
四五	四	野村少佐以下残全員「コタバト」出發
四五	五	「ボゴール」に於て武装解除の上 「バタバア」に到着 連合軍の労役に服す
五九	五	本廠地区倉庫工場の引継を完了す（蘭軍經濟部）

年月日	概要
昭 三 五 五 五 七 年 五 月 五 日	<p>本廠旧残置隊武装解除を受く 「セルボン」彈薬派遣瀧川少尉以下「バタビヤ」に到着 本部人員三十名軍補給廠の編成に伴い同廠に編入 石原大尉以下三十五名「ニューギニア」「ホーランヂヤ」作業隊に編入 す 余後本部は軍補給廠に於て業務に服し大部人員は「クマヨラン」作業 に在りて連合軍の労役に服す 歴代廠長 陸軍中佐 下田 剛 “ “ 菅 泉 秀 吉 “ “ 大佐 藤 本 清 市 オナエ野戦兵器廠長 藤 本 清 市</p>

第十六軍野戦貨物廠部隊略歴

通称番号 治オーロミホニ部隊
 部隊長 陸軍主計大佐 土

正雄

年月日	概要
昭 夫 十 三	編成完結 毛營（東部才十二部隊）出発 宇品港高雄を経て
十 三	「ヌムラ」湾に船団集結 別に一支隊は「スマトラ」「パレンバン」攻略部隊に配属せられ主力に 先ち出帆す
三 一	主力は爪哇島に上陸 糸末本廠を「ジャカルタ」に置き「バンドン」 「スラバヤ」に支廠を「スラカルタ」に出張所を開設し軍需品の整備 補給に任す
千 八 五	尚上陸作戦に当りては一支隊を才四十八師団に配属し且 出張所を東 海林支隊に配属せしめらる 大東亜戦争終戦の爲め廠関係の物件の引継ぎ準備及聯合軍に対する補 給に任す

昭 年 月 日	自 三 三 一 至 三 七
概 要	<p>尙一部を以て同軍の勞務に服せられた 主力は依然爪哇島に在り オ十六軍司令官に隷屬被遷なし 参加せる主要なる作戦(戦斗)の概要</p> <p>爪哇島上陸作戦に参加す 即ち西部爪哇ヌラク附近に上陸 ヌラク セランに補給兵を崩設 主力は シヤカルタに進出本廠を設置す 別行動の一支部はオ四十八師団と共に東部爪哇に上陸してスラバヤに 支廠を崩設 東海林支隊と行動を共にせる出張所はバンドンに支廠を 崩設せり</p>

-163-

0185

第四鉄道輸送司令部隊略歴

才四鉄道輸送司令官 神田直光
 歴代部隊長 陸軍大佐 松村省吾
 陸軍少将 宇野遙雄

年月日	概要
昭和九年五月	軍令陸甲才甲才六十一号に依り編成完結 才十六軍司令官の隷下に入り爪哇島に在りて島内に於ける軍率鉄道輸送の処理に任ず
九月三十日	南方軍野戦鉄道司令官の隷下に入り前任務を続行す 治作命甲才一〇二六号に依り爪哇鉄道隊編成せられ才四鉄道輸送司令官は才四鉄道輸送司令部及鉄道輸送司令部及鉄道総局を統合指揮す
十月六日	「ジャワ」「バンドン」市に於て下士官一戦病死す
十月八日	終戦
十月十五日	才十六軍司令官の隷下に入り前任務を続行しつつ終戦処理に任ず

年月日	概要
昭和十一年	<p>「インドネシヤ」暴徒の襲撃に依り「スマラン市」「スルー」刑務所に於て下士官三名雇員四名戦死す</p> <p>治命甲ヤ一六七号に依り爪哇鉄道隊編成を解かれ 当日に於ける編成職員別紙の如し</p> <p>「インドネシヤ」暴徒の襲撃に依り「ボゴール」州「チマンデー」に於て將校一名戦死す</p> <p>「ボゴール」州「チロハン」に於て雇員一名離隊逃亡行方不明となる</p> <p>「インドネシヤ」暴徒に依り虐殺せられたる獄大なり</p> <p>「ボゴール」州「チロハニ」南方才五陸軍病院に入院中雇員一名離隊せるものの如し</p> <p>内地帰還のため爪哇「タンシヨンプリオーク」港抜錨</p> <p>広島上陸地支局（大竹出張所）に於て復員完結</p>
十一月	
十一月	
十一月	
三月	
六月	
六月	

独立混成才二十七旅団部隊略歴

歴代部隊長 陸軍少尉¹³ 川原直一
 陸軍少將 馬淵逸雄

年月日	概	要
昭和 一 一 十	才十三独立守備司令部軍令陸甲才一〇六号に依り編成改正下令 編成完結	
平 八 五	終戦后左記部隊司令部に転入す	小柳津大佐以下一三名
	才十六軍臨時板補充馬廠	河内中佐以下二一名
	南方軍防疫給水部	田中大尉以下九名
	南方軍築城部	柴田中尉以下四七名
	南方軍才三通信隊爪哇地区通信隊	小林大尉以下九名
	才十六軍經理部出張所	大木中尉以下一七名
	バンドン兵站事務所	
	死亡者 三名 行方不明者 一名	逃亡者 五名

独立歩兵才百五十三大隊略歴

歴代部隊長

陸軍中佐 中川 武三
陸軍大佐 永井 卯吉郎

年月日	概	要
昭和十一年十月	「シヤワ」島「バニロマス」州「フルオケルト」郡「フルオケルト」村に於て編成	
昭和十四年四月	「バニエマス」州及び「ベカロンガン」州の警備並に西州の築城作業に従事	
昭和十四年九月	「チルボン」州「マヂヤルンカ」県「ヌヂヤルンカ」郡「マヂヤルンカ」村に移駐「チルボン」州の警備並に築城作業に従軍中終戦に至る	
自昭和十四年九月	「チルホン」県「パリマナン」郡「クドンスレテル」村に移駐し「シヤワ」島島嶼に至る迄引続き警備に従事す	
		「インドネシア」原住民騷擾事件あり此が宣撫工作並に鎮撫指導中の部隊長中川中佐以下六名原住民の襲撃を受け「ワルー」村及「ババカ」村に於て戦死す

年月日	概要
昭三 五 四	主力は「チルボント」港出港
六 九	「ガラント」島松ヶ浜港上陸
六 六	「ガラント」島栄沖出帆
七 一	宇品港入港
七 一	宇品港上陸復員解除す
	尚第一中隊及才三中隊のニケ中隊は「シヤワ」島「ホリアンガン」州「チマヒ」及び「バンゲヤラン」に於て附近の警備に従事中心なり
	指揮執費関係及び其の送還の概要
	オナエ軍医立派オナエ七旅団
	参加せる主要なる作戦（戦斗）の概要
	「バニコマヌ」州及び「ペクロンガン」州の警備
	「チルボント」州の警備

0190

年月日	昭 和 十 七 年
報 要	<p>終戦より序遷迄の行動</p> <p>一チルボーン州マカヤルニカレ村より、パリマナンレ村へ移駐し、同地に州内軍兵邦人ニ向テ名を收容保護シ、一方原住民ノ宜撫ニ努カレ、つありたり</p> <p>此ノ間、部隊移駐予定地たりし、パリアンガン州、リースレの設営並に、バドワノンレ、固守警備のため一部ノ兵力を使用セリ</p> <p>「ジバロ」高嶺部ノ際レ、ケルボノ州内抑留中ノ「APW」及「混血住民」ノ自ニイテ多ク救出「バク」トシテ送致シ、日本軍人ノ並ニ亡命（陸軍一、海軍四）ハ旅團長ノ命ニ依リ「カニン」高嶺同行、爾後方面へ引渡シたり</p> <p>英印軍オニ十三師団司令に依リ西新地ニ隊命令に依リ「ジバロ」高嶺部ノ白人携行兵器を呑み全戦時物資は破壊により破壊し非戦時物資金貨は「TR」オニ師団長に引渡シ、部隊保有全車輛には燃料を搭載シ「ブリアン」ガン州「ラン」テマケツクレに輸送シ、車輛燃</p>

0191

年月日									
概要	<p>料芝に西新地に隊司令官邸に返納せり。御隊商賣に際してはインド オシアレ國軍は良く御隊の移動に備わし望軍に好意を承せり 其の御隊の経歴中特異と認めらるる事項あり</p> <p>歴代御隊長名</p> <table border="0"> <tr> <td>初代</td> <td>陸軍中佐</td> <td>中川</td> <td>武三</td> </tr> <tr> <td>二代</td> <td>大佐</td> <td>永井</td> <td>仰吉</td> </tr> </table>	初代	陸軍中佐	中川	武三	二代	大佐	永井	仰吉
初代	陸軍中佐	中川	武三						
二代	大佐	永井	仰吉						

独立混成第二十八旅団独立歩隊第百五十四大隊略歴

部隊長 陸軍大佐 小原 甚吾

年月日	概要
昭 三 十 三 年 三 月 三 日	「シヤカルタ」に於て独立守備歩兵第百五十二大隊編成完結（七三四名） 「スラバヤ」市に移駐し爾来東部瓜哇の防衛に任ず 防衛擔任地域「スラバヤ」州「マドラ」州にして「マドラ」州に於て 中隊を分駐す
自 大 正 九 年 三 月 一 日	本部の一部を除く部隊主力を以て「アスキ」州「ケンケヨン」南方海 岸（「アスキ」「マラン」両州に亘る）一帯に半永久防衛築城構築 初年兵八十二名入隊（内地より）
大 正 十 年 三 月 十 日	第一次瓜哇防衛義勇軍編成完結（現地住民） 地区内六回大団（スラバヤ州ニケ大団 パデー州一ケ大団 コドウラ 州ニケ大団 ボシヨネゴロ州一ケ大団）の編成並に教育指導を擔任す
大 正 十 一 年 三 月 十 日	「スラバヤ」に於て独立歩兵第百五十四大隊に改編し編成完結 （一、〇三六名）

年月日	至自	概要
三月二日	至自 至 三	才十六軍実施の「マラン」 「アスキ」 函州南方海岸附近に於ける防衛訓練参加
四月	至自 至 四	才二次防衛義勇軍編成定結（原地住民） 「スラバヤ」 州才三大団の編成並に教育指導を擔任す
五月	至自 至 五	才三次防衛義勇軍編成定結（原地住民） 地区内八個大団（スラバヤ一ヶ大団 バブーニヶ大団 マドラニヶ大団 ボシヨネゴロニヶ大団）の編成並に教育指導を擔任す
五月	至自 至 五	才一回兵補充ニ名採用各中隊に編入（現地住民） 地区内警備に關する任務を防衛義勇軍に移譲し純作戦部隊として態勢を強化確立す
七月	至自 至 七	本部の一部及才四中隊を「スラバヤ」兵營に残置し部隊主力は「スラバヤ」 「ボシヨネゴロ」 函州北方海岸に於ける要地に野戦築城構築
九月	至自 至 九	初年兵四五名入隊（内地より）
十一月	至自 至 十一	初年兵六四名入隊（現地徵集）

年月日	概	要
昭和十三年十一月十五日	初年兵三五名入隊（内地より）	
昭和十三年十一月十四日	オ十六軍実施の瓜哇北方海岸に於ける防衛村動橋頭堡攻撃の廠營訓練参加	
昭和十三年十一月十一日	本部一部及オ四中队を「スラバヤ」兵營に残置し主力を以て「スラカ	
昭和十三年十一月十日	ルタ」北方地区要地に半永久築城を構築	
昭和十三年十一月五日	現地徴集初年兵二三名入隊	
昭和十三年十一月一日	本部の一部及オ四中队追撃中隊を「スラバヤ」兵營に残置し部隊主力は「カリアガン」州東方地区に單縦複廊半永久複廊陣地（新戦法に依る）構築	
昭和十三年十一月一日	新に「スラバヤ」「マドウラ」両州の警備を擔任し一般情勢に鑑み皇	
昭和十三年十一月五日	軍兵力のみを以て管内の警備を強化す	
昭和十三年十一月一日	「バンドン」東方「チバトール」に於て築城作業実施中終戦命令を受く	
昭和十三年十一月一日	逐次原駐地に復帰を開始す	
昭和十三年十一月一日	軍は瓜哇防衛義勇軍の解散を命ず	

年月日	概要
昭和八年八月	地区内各大団に兵力一ヶ小隊宛を派遣し解散業務の援助並に兵器彈薬の引揚げを実施す
八 五	兵器奉還式を実施し兵器の集結を開始す
八 一	兵補を解除す
九 四	連合軍進駐時に於ける業務引統に必要な人員を(五十名)残置し他は武装解除後の集結地「クテイリ」州「ハネック」に移駐し仮兵舎の築造を圖の崩壘をなし復員迄の自活準備をなす
九 七	連合軍進駐時に於ける兵器の引継擔任部隊となり左記兵器の集積並に引継書類の準備をなす
九 七	独立歩兵才百五十四大隊保管兵器彈薬車輛
九 六	義勇軍十五ヶ大団分の保管兵器彈薬車輛
九 六	「スラバヤ」邦人報回團保管兵器
九 六	連合軍進駐迄の向兵力の使用を警備力の強化に指向し集結予定地にある各隊の兵力を現地警戒の爲一ヶ中隊余を残置し他は全部「スラバヤ」兵營に復帰せしむ

夕外ク (シヤワ)

年月日	概要
昭和九年九月	<p>連合軍の扶恤隊へ將校三 下士官三 飛行機より落下傘により部隊前本場に降下す</p>
九月	<p>「スマトラ」州の警備に關する任務を「スラバヤ」憲兵隊長に移譲す 各方面の日本軍の武装解除及和蘭軍の近く進駐するを予想し「インドネシヤ」は年末の願望たりし独立に対し不安を抱き治安状況遂次不穏となりたるに依り警備兵力を配備し治安維持兵力を強化す</p>
十一月	<p>「スラバヤ」騷擾事件勃発す 大隊は自隊兵力及被配屬部隊約一千二百名を以て之が慰撫鎮壓に努む</p>
十一月	<p>旅団長は連合軍進駐準備委員長に対し局地降伏をなす</p>
三月	<p>大隊は「バンドン」東方「チバト」に於て築城作業中終戦の大詔を待す (終戦より帰還途の行動の概況)</p>
三月十七日	<p>連合軍及「インドネシヤ」協力のもとに内地送還を開始 「ナウイ」部隊出發 「スラ」部隊出發 「ヌコボリンゴ」港より乗船 「ヌヌット」部隊出發</p>

0197

内
フ
シ
ヤ
ワ

年月日	
概要	昭 三 七 八 五 七 大竹港上陸 復員を完結解散す コレンバンレ島に於て大隊全部を集結掌握 同島坐落

独立混成第二十八旅団砲兵隊略歴

歴代部隊長 不明

年月日	概	要
昭和十一年十月十一日	追撃才十一大隊才二中隊を基幹とし 昭南島に於て編成 同日才十六軍隷下に入る	
昭和十一年十月十八日	爪哇島着東部爪哇防衛作戦参加	
昭和十一年十月二十日	編成改正	
昭和十一年十月二十五日	編成改正	
昭和十一年十月二十六日	終戦より帰還迄の行動の概要	終戦時スラバヤに駐屯しありたるも終戦に伴い移駐地ブスキ州「ゲヌンラロン」に移駐す その後状況の変化に依り再びスラバヤ警備のため部隊主力「スラバヤ」に帰隊し「インドネシア」
昭和十一年十月二十九日	独立騷擾事件のためインドネシア側に抑留さる	
昭和十一年十月三十一日	ブスキ州の分はレバン島に移駐	
昭和十一年十一月二日	レバン出發、内地帰還し	
昭和十一年十一月七日	復員完結 編成地（昭南島） 兵出陣地（混成）	

年月日	昭 三 七 六 七 年 八 七 月 七 日
概要	<p>主カ部隊は「ガラン」島に移駐 同島出港内地帰還す 復員完結</p>

夕外 8 (シヤワ)

独立混成第二十八旅団工兵部隊略歴

敬才五二一八部隊

部隊長 陸軍大尉 内藤省三

年月日	概	要
昭大 十三 四	盛岡工兵才四十七連隊に於て独立混成才二十八旅団工兵隊として編成	
三 六	門司港出発	
六 一 六	泰国「パクナム」港上陸	
一 一 一	泰国盤谷着	
一 一 一	泰国盤谷出発	
一 一 一	泰国馬來國境通過	
二 一 一	昭南港出発	
二 一 八	「シヤワ」島「タンジョン」オク「港上陸	
二 一 三	「シヤワ」島「スラバヤ」着	
二 一 六	余後同地に在りて東部「シヤワ」防衛に従事	
終戦より帰還迄の行動概要	終戦後兵力の約半数を独立歩兵才百五十四大隊に配属し「スラバヤ」市内の警備に従事し、残余は連合軍進駐のため宿舎の設備及部隊移駐予	

タ内ヤフ

年月日	昭	概要
三 五 三		定地に於ける設営中「スラバヤ」を中心とする「インドネシヤ」の騒擾事件突発し夫々彼等の手により收容せられ「ススギ」卅の移駐予定地に在りたる五八名は独立歩兵才百五十七大隊（大久保部隊）と行動を共にす
六 十	三 五 三	「スラバヤ」市内に在りたる三六名は独立混成才二十八旅団司令部と行動を共にし「スロポリンゴ」港出發
七 五	三 五 三	「レンパン」島にて蕨城に乗艦
七 六	三 五 三	同地出發
七 五	三 五 三	大竹港に到着す
六 六	三 五 三	「スラバヤ」に在りし一〇八名「スロポリンゴ」港出發
七 五	三 五 三	「レンパン」島にて朝汽丸に乗艦内地に向う
<p>編成地</p> <p>岩手県盛岡市</p>		要
<p>発身地</p> <p>青森、岩手、秋田、山形</p>		
<p>(現地入営兵は全県に亘る)</p>		

独立混成第二十八旅団通信部隊略歴

隊番号一〇八二六部隊 部隊長 陸軍大尉 桐田利三郎

年月日	概要
昭和十一年六月	軍令陸甲第六号を以て編成下令隊長以下約半數は同年十月三日弘前市
九月	大阪港生花製糖工場に於て、先づ、スラバヤ市に到着、尚他ノ半部
十月	三那播八日、マラバヤ市に於て、編成着手、同日十日編成完了
十一月	爾來東部爪哇の警備並に通信連絡に任じ終戦に至る
十二月	下士官一名戦死
一月	下士官一名戦死
二月	終戦
三月	インドネシヤ騒擾事件により下士官一名戦死
四月	蘇波地 爪哇島マラン市
五月	位置 爪哇島スラバヤ市
六月	尖出育地 殆ど全国に亘るも山形、秋田最も多し

特設海上輸送第一中隊略歴

部隊長 陸軍大尉 鈴木 弘

年月日	概	要
昭 和 五 年 五 月 三 日	編成完結	
昭 和 五 年 五 月 三 日	「成」作戦参加	
昭 和 五 年 五 月 三 日	オ十一号輸送参加	
昭 和 五 年 五 月 三 日	「スラバヤ」移駐	
昭 和 五 年 五 月 三 日	「ムソ」村移駐集結	
昭 和 五 年 五 月 三 日	「ガラン」島移駐「ラガル」港出帆	
昭 和 五 年 五 月 三 日	名古屋入港 復讐完結 召集連隊解除	
昭 和 五 年 五 月 三 日	編成地 ジヤワ島バダビア	
昭 和 五 年 五 月 三 日	位置 ジヤワ島スラバヤ	
昭 和 五 年 五 月 三 日	終戦より帰還迄の行動の概略	終戦時「スラバヤ」にあり、ニツ、五
昭 和 五 年 五 月 三 日	ニツ、五「ソロ」附近ムソ村集結	